

命の持続可能性

鎌仲 ひとみ

3.11の震災が起きた瞬間、私は「ミツバチの羽音と地球の回転」という映画を渋谷の劇場で上映していました。原発建設に30年も反対し続けてきた瀬戸内海、祝島の人々と再生可能エネルギーで自らの地域を自立させようというスウェーデンの取組を描いたものです。日本が持続可能なエネルギーへとシフトする希望を込めて、この映画を作りました。しかし、今回の原発事故で日本の広大な面積が放射性物質によって汚染され、子どもを含めた非常に多くの人々が被ばくする事態になってしまいました。

私が長く、核や被ばくをテーマに映画を作り続けてきた、その動機は二つあります。

一つ目は「子どもたちの命を守りたい」ということ。被ばく被害は若い人ほどリスクが高まります。今回の事故で最も問題となっているのは、長期に亘る低線量の被ばくです。どんな影響が出るのか、まだわかりませんが、無用な被ばくをせずに、子どもたちが健やかに安心して生きていける環境を保障するのは、私たち大人の仕事であるはずで。しかし、進行している現実とは真逆です。

二つ目は「情報を開く」ということ。原発に関して沢山の情報が隠ぺいされ、必要な時に私たちに届いてきませんでした。政治的な意図に左右されずに、きちんと情報を開くべきだと思います。

映画を作ることで少しでも持続可能な社会になるために貢献したいと思ってきました。「持続可能性」の究極は「命の持続可能性」です。しかしそれは夫婦、家族、地域、社会が持続可能でなければ保障できないということも、今回の事故で見えてきました。

今、「小さき声のカノンー選択する人々」という新作映画を作っています。命を守るために立ち上がった「女性」たち取材しました。私は、「原発」は男性性の象徴みたいなものだと思います。命に関わる大事を男性だけに任せることなく女性が責任を負う、そんな社会を作っていかなければ、という思いを今回の映画に込めています。



PROFILE

かまなかひとみ：映像作家。環境・核・エネルギーなどマスメディアが扱わないテーマを追求。ドキュメンタリー映画を市民に自主上映してもらう方法で作品を届けている。「ミツバチの羽音と地球の回転」(2010)は全国約600カ所、「内部被ばくを生き抜く」(2012)は全国850カ所で上映、さらに海外でも上映が広がり各地で大きな反響を呼んでいる。現在、新作「小さき声のカノンー選択する人々」を制作中。